

## フィリピンの情報

### 図書館

国立図書館 (<http://web.nlp.gov.ph/nlp/>)

利用料は 50 ペソ。改修工事中、司書の対応ずさん、OPAC 検索可  
OPAC 検索不可の資料について対応が悪い。  
改修工事中のため貴重な資料へのアクセスができないことがある

アテネオ大学リザル図書館 (<http://rizal.library.ateneo.edu/>)

利用料 100 ペソ、司書の対応は丁寧。OPAC 検索可。1 枚 2 円程度で一般書籍のコピーは可能。外部者の貸出不可。ID 持参不可欠（他の私立大学も同様）。

（参考：ラサール大学、University of Sant Thomas も同様。また後者の二つはドレスコードがあり、半ズボンとサンダル等での軽装では入れないことも）

アメリカ植民地期の資料充実。ただし、植民地期の資料のコピー：一枚 80 ペソ  
Manila Times (1945 年以降) など日刊紙のマイクロ可  
Philippine Daily Inquirer 紙と Philippine Star 紙のデジタル化 (DVD) (2000 年以降)  
植民地資料、新聞などは図書館の Periodical Index での検索が必要  
修論と博論のリストと現物あり。コピー不可。

フィリピン大学附属図書館 (<http://ilib.upd.edu.ph/>) (各学部にも図書室あり)

利用料：50 ペソ、OPAC 検索可。

古いフィリピン関連の書籍が利用しやすい。

マイクロフィルムの保存状態は場合によっては劣悪（アテネオ大学図書館のほうがよい）。

修論、博論は 10 以上の各学部の図書室にあり。OPCA にないものもある（→図書室巡り）。

紙媒体の雑誌は写真撮影可の図書室もあり。

附属図書館の UP Archive：Roxas Paper, Quirino Paper といった 30-60 年代の大統領関連資料あり。

外部者への貸出不可。利用も図書室によっては指定曜日制

ロペス図書館 (移設中。2019 年前期に再開)

利用料 100 ペソ (?), 司書対応良。ロペス家管理の図書館、貸出不可

Manila Times のデジタル化終了。ただし、OCR 未了。プリントアウトが一枚 100 ペソ

### 本屋

Solidaridad bookshop (<https://www.facebook.com/solidaridadbookshop/>)

フィリピン研究者の御用達。大学出版書籍入手可。

Ateneo de Manila University Press (<http://ateneo.edu/ateneopress/>)

アテネオ大学内書店。書籍はアテネオ大学出版のもののみ。

NUS や他大学出版の書籍がアテネオ大学から再出版され破格になっていたりする。

UP Press (<https://press.up.edu.ph>)

フィリピン大学内書店。フィリピン大学出版書籍のみ。

フィリピン語の出版物もあり、歴史、映画研究などはフィリピン語のものが多い。値段も比較的にお手頃。

### オンライン書店リスト (古本屋も含む)

<https://www.spot.ph/shopping/the-latest-shopping/68393/10-online-booksellers-in-the-philippines-a00171-20161111-lfrm>

### 文献や資料のデジタル化の試み

今まさに進められている途中。

### 新聞

日刊紙

Philippine Daily Inquirer (<https://www.inquirer.net/>)

Philippine Daily Inquirer の本社は Makati にあります。そこでは、1996 年から現在までの記事がアーカイブ化されており、キーワード検索を利用をし、必要な記事をプリントアウトすることができます。もちろん Inquirer のオンラインでも検索はできますが 2010 年以前の記事はすでに消失していることが多いので、めぼしい記事を探す際には非常に役立ちます。一枚 5 ペソです。

Philippine Star (<https://www.inquirer.net/>)

Manila Bulletin (<https://mb.com.ph/>)

### オンライン・ジャーナル

Rappler (<https://www.rappler.com/>)

調査報道系

Mindanews (<http://www.mindanews.com>)

ミンダナオ情報に特化したオンライン・ニュース・サイト

### 雑誌

Philippine Free Press

戦前から発行。

## 国家による検閲、監視

Rappler はドゥテルテ政権による人権侵害等を批判する記事を掲載し続けた結果、営業権の停止などの警告。セルフ・センサーシップは働いていると思われませんが、直接的な検閲はそこまで強くない。セブやバコロッドなどでは警察がジャーナリストの個人情報を入手する場合あり。マニラ首都圏については少なくともそういうことはない。

## オンラインでの資料へのアクセス度

現在の資料については比較的アクセスしやすい。新聞や雑誌についてもオンラインで掲載されているものが多い。一方で、1990年代以前になるとネットでは調査不可。植民地期以降の1946年から1960年代半ばまでのローカルな資料を探すのは非常に困難。また行政資料についても大まかなものは統計局 (<https://psa.gov.ph/>)で利用可。しかし、限度あり。

## フェイクニュースなどへの対策

ほとんどされていない。フェイクニュースで溢れている。ただし、フェイスブックの暴力や性的な画像・動画を検閲し削除する会社がマニラにある。 <http://www.gebrueder-beetz.de/produktionen/the-cleaners>